# 真剣で私に恋しなさい！～川神市逗留記～

アミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私に恋しなさい！～川神市逗留記～

【Ｎコード】
Ｎ３８７２Ｘ

【作者名】
アミ

【あらすじ】
神奈川県川神市、私立川神学園。今年も桜の咲く季節がやってきた。
去年がそうであったように今年の入学生も一癖ある者たちのようで・・・・・？
※評価や感想大歓迎です！気軽に書いていってください！

## プロローグ（前書き）

設定を一新して始めさせていただきます。
オリ主、ご都合主義などがございますのでご注意を。

# プロローグ

じりりりりりん、じりりりりりりん。

玄関の脇に置かれたちょっと古めのファックス付き電話がけたたましく鳴り響いている。

家の、というか部屋の主である男は先日値下がりした際に購入した最新型の携帯ゲーム機に夢中だ。

どうせたいした用事でもないだろうし、無視してしまおうかとゲームを続ける。

「・・・・・・あ、打たれた」

ドン！

隣の部屋の住人が五月蝿さに耐えかねて壁を殴ったようだ。

その一発で安普請のアパートはぎしぎしと軋み、天井からぱらぱらと埃が落ちてきた。

やれやれとばかりにゲームの電源を付けっぱなしにしたままベッドの上に放り出し、電話へと向かう。

「義一、荷物届いたか？」

電話を取って開口一番そんな言葉が聞こえてきた。
どこぞの銀河帝国皇帝のような、好青年系の若々しい声だ。
紛れもなく、義一の父親である、伊吹幸一の声であった。
技術者である彼は、アメリカのフロリダあたりでスペースシャトルの開発に関わっているそうな。
ケネディ宇宙センターとか言ったか。まあ、どうでもいい話だ。
今年は正月に日本に戻ってきたきりで、さっぱり音沙汰なかったのにどうしたことか。

「ん、ああ、父さんか・・・・・・届いたけど？」

今朝届いた青と赤のストライプで縁取りされた、きれいなダンボール箱は工作机の上に放置されている。
ダンボール箱に貼り付けられた受領証の宛名の欄には、英語でＭＲ・ＹＯＳＨＩＫＡＺＵ　ＩＢＵＫＩとか書かれている。
ちょっぴり怪しい見た目だが、この箱が送られてくるのは二度目だ。
カッターを使ってダンボールを開封すると、中には封筒と、七つほどに分割された機械部品の梱包が出てきた。

「中身は見てないのか？新しいパーツと向こう一ヶ月の生活費だよ。もう調整ぐらい自分でも出来るだろ？」

「うん。もうそっちはすっかり・・・・・・だけど、なんでまた生活費を？」

生活費は月の初めに銀行の口座に振り込まれていた筈だ。
今月はまだ引き落としに行っていないからわからないが、生活費の仕送りの方法を変えるつもりなのだろうか。

「いやさ、おれとお前の口座なんか凍結されてんだよね。えーっと、なんつったっけ・・・・・・相続税じゃなくてさ、アレ」

「えーっと、ぞ・・・・・・贈与税？だっけ？」

「ああ、そうそれ！それがどうとか税務署と裁判所から手紙が着ててさ、なんかしばらく調査が云々・・・・・・ってわけ。だから生活費も郵送で送った」

「なるほど、わかった」

聞くなり義一は封筒のフラップの隙間に小指を突っ込み、乱暴に引き裂いて中身を取り出した。
しかし、中身は日本円で一万円札が一枚だけ入っていた。いかにも少ない。
もしや裏側に小切手でも張り付いているのかと内側を切り開いて見てみるが、やはり何もなかった。
どうやら、向こう一ヶ月の生活費とやらはたったの一万円だけらしい。

「一万円しか入ってないんだけど、後から来んの？」

「いやー、ハハハ！」

「ハハハじゃないが」

「ネットで予約するさあ、宅配サービスってヤツあるじゃん？お前も使うだろ、アマゾンとか」

ゲームだろうが食品だろうが家具だろうが家電だろうが、何でも届けてくれる、引きこもりの味方だ。
かくいう伊吹もヘビーユーザーで、部屋の片隅には天井に届かんばかりにアマゾンの箱が積まれている。

「使うね。それが？」

「フロリダでは暇しててな。おれ優秀だから残業とかって殆どないんだわ。こっちじゃそれ常識」

「へえー、いいじゃん。おれもそっちで就職しようかなー」

「いや、やめとけ。アニメが見られなくなるぞ。レンタルもないし、輸入品のＤＶＤボックス買わなきゃならんから偉い出費だぞ・・・・・・」

ここまできて何か顛末が予想できるようになってきた。
幸一は今年で四十になるというのに、子供のようにホビー趣味にどっぷりハマっている。
昔の話をすると、ワシントンの一軒屋の自宅で家族三人で暮らしていたころ、大きな間取りの幸一の書斎があった。
基本的に誰も入れない。特に妻は絶対に入れない、彼だけのスペースだった。
よほど大事な書類や研究資料があるのだろうと子供心に義一は思っていた。
だが、身体が弱かった義一の母がはやり病で亡くなり、遺品整理とともにその家は引き払うことになったのだが、その時に書斎の真実は明かされた。
書斎、自宅に構えた仕事のスペースだと思っていた。しかし、それはただのプラモ部屋だったのだ。

パーフェクトグレードモデル、ＲＸ７８－２ガンニョムを始めとして、凄まじい数のプラモ、プラモ、プラモ！
少なく見積もっても二百体は超えていた。改造などの為のツールやキットも完備されており、あれぞホビーギークの部屋だった。
そんな彼の悪癖は――――フロリダでも、発揮されていたのだ。

「タンス預金はあったんだけど、ちょっと買いすぎちゃって。当分カツカツでさ、めんご」

「めんごじゃねーよっ！一ヶ月の生活費が一万円！？どうやって生きていくんだよ！」

「水飲んで塩舐めてれば意外と生きていけるもんさ。おれ、大学時代のときそれで二ヶ月しのいでたし」

ガチャッ、ツー、ツー、ツー・・・・・・

捨て台詞みたいに言って切りやがった。
リダイヤルしても回線は繋がらず、フロリダでの詳しい住所も知らない以上、これ以上の労使交渉は上手くいきそうにない。

「あの最低野郎！一万なんざ電気代でフっとぶわ！」

確か、今回凍結された口座の銀行とは別に持っている、郵便貯金の口座には四万円弱ぐらい入っていた筈。
父親の悪癖が遺伝したのか、学用品を買い揃えたりする際に、いい機会だと思いっきり散財したばかりで財布の中はもはや空。
手のひらに乗っかった一万円分の日本銀行券に目を落とし、ぢっと見つめる。
何度見ても一枚しかない。

「・・・・・・」

ビスケットやわかめみたいに増えないかと思いたち、叩いたり、水につけたりしてみる。

だが、当然のことだが、やはり増えたりはしない。

あまりにもバカみたいなことをしている自分の姿をかんがみると、ぽろぽろと涙がこぼれてきた。

「くそぉ〜〜！」

薄汚いアパートの一室に男の叫びと、隣室からの壁ドンッ！が響き渡った。

# 第一話　入学式にて

今日は高校の入学式。
ネクタイを締めて新しい制服に袖を通すと、不思議と気持ちが引き締まるものだ。
鏡に映る自分の顔にうっすら生えていた髭を見て取り、剃刀とシェービングクリームを手に取る。
お湯とシェービングクリームをつぼに入れ、たぽたぽたぽ、と音を立ててそれをかき回す。
人肌に温まったそれを口の周りに塗りつけ、程よくなじんだら剃刀の刃を立てて、壁にかけてある革砥で研磨する。
ある程度研磨できたところで、義一は触れただけで皮を裂いて肉を切るほどに切れ味を増したそれを、首筋に立ててゆっくりとスライドさせた。

そり、そり、ぞり、ぞり、そりっ・・・・・・・

「ふーっ、いや・・・・・・うーん、マンダム」

お湯で流してお絞りで顔を拭えば至福の時間である。
母方の祖父からの隔世遺伝のせいか、若干体毛が濃い義一は三日に一度は髭を剃る。
つるつるになった顎には少しだけ血がにじんでいる場所もあるが、

凄まじい爽快感だ。

「元気溌剌ぅ」

大多数の人間にとっては憂鬱な筈の月曜日の朝だが、この習慣を続けている限りその手の憂鬱とは無縁でいられそうな気がする。
鏡の前で男前になった自分の顔をナルシスチックに数秒間見つめた義一は、櫛を手にとって今日の髪型をセットする。
いつもどおりのギャルゲー的無個性型主人公スタイルであった。

「・・・・・・」

わかりやすくいうならば、前髪は目にかかるぐらいでぼさぼさ。後ろ髪は肩にかかるかかからないかぐらいでぼさぼさ。
一般的な視線から評するならば、オサレ浮浪者スタイルといってもいいだろう。
本当はウザい前髪をバッサリ切ってスポーツ刈りとかにしたい気持ちもあるのだが、出来ない、というかしたくない事情もある。

「・・・・・・よし、いい感じだな」

左目と同じ藍色を宿した右目をいじりながら違和感がないかを鏡で確認する。
拭い難い違和感はどうしようもなくあったが、それでも前髪のおかげで大分中和されている。これならば問題ない。

「えーーっと・・・・・・」

ポケットに財布を突っ込もうとして、中身にいくら入れていくべきかに悩む。

幸いにも教科書や体操服など、学生生活に必要なものは既に購入していたからその心配はいらなかった。
だが、入学式後は交友費などの関係でいろいろ物入りになるだろう。

「二万円、ってところかな・・・・・・」

友達は早く作りたいし、早くなじみたい。
しばらく学校生活というものをやってこれなかったからこそ、再び楽しい学生生活を送りたいのだ。
なけなしの一万円札を二枚財布に突っ込むと、義一はかばんを持ってそそくさとアパートを出て行った。

六畳半の安アパートから出れば、そこは工業地帯の薄ぼんやりとした空気が立ち込める。
この辺一帯は少し治安が悪いのだが、腐っても日本だし、なにより月曜の朝っぱらから出没する悪党はそうはいない。
悪党というのは大抵、闇夜にまぎれて悪さをするものなのだ。

「・・・・・・いーい天気だなー・・・・・・」

身体にたまった悪いものを打ち払ってくれるような、爽やかでいて猛烈な日差しだ。
浴びているだけで健康になってくるような気さえするし、今日から通う通学路がきらきらと輝いて見えてくる。
・・・・・・実際、親不孝通りとか呼ばれているホテル街のほうは

朝にもかかわらずまだネオンが光っているのだが。
不健全なものはあまり視界にいれないようにしよう。

「ここは多馬川」

工業地帯を抜け、何もない道をしばらく歩くと大きな川が見えてきたので、誰にとも無く解説を。
ここ数週間、義一が毎日通っていた場所のひとつである。川辺で散歩をするとなかなか気持ちいいのだ。
ちなみに、毎日のようにこの辺を体操服姿で走っている女の子がいる。彼女は何者なのだろうか。

「・・・・・・」

橋を渡ると、和風の大きな校門が見えてくる。
今日から義一が通うことになる川神学園だ。
校門をくぐると、大きな人だかりが出来ていて、近寄ってみると、なるほどそこにはクラス編成が書かれたボードが掲示してあった。
百八十一センチの年の割りに高めの背丈を利用して背伸びして自分の名前を探すと、はたしてそれはC組の欄にあった。
出席番号二番、伊吹義一。他に見覚えのある名前はない。

「んーっ・・・・・・見えない・・・・・・」

「ん？」

首筋に、そんな声と同時に生暖かい鼻息のようなものがかかった。
振り返れば思い切り背伸びをしている女子生徒がいる。
バレッタで後ろ髪を纏め上げた髪型の、同年代の平均的体格の普通の女の子だ。見た目はそこそこ可愛い。

どうやら背丈が足りなくて掲示板が見えないようだ。
百七十前後の体格の男子生徒が列を成しているのだから当然といえば当然だろうか。

「なあ君、名前は？」

「え、ええっ？」

「おれ図体でかいから、よく見えると思うぜ」

「あ、その・・・・・・大和田、伊予です」

いい天気だし、せっかくの門出の日だ。誰かに親切にして善行を積むのも悪くない。
まあ、おしゃべりできる友達が出来るかもしれないという下心もない訳ではない。
そんなわけで、義一はちょっと怯えた様子の彼女の名乗った、大和田、という苗字を探す。

「お、おーーー・・・・・・あった。おれの次じゃないの」

「え？」

「大和田伊予は一年C組で出席番号は三番。俺は二番の伊吹義一だ。これからよろしく」

「あっ、よろしくお願いします」

律儀にぺこりとお辞儀をした。親のしつけがよかったと見える。
それに対して義一が、ご丁寧にどうも、と軽く会釈を返すと、更に

横合いから声がかかった。
中肉中背の、ちょっと地味なタイプの男だ。あえて悪く言うならば、1ルート限りの出演。
数クリックで二度と表れないぐらいのモブ。名前があるのが奇跡なレベル。

「あれ、君たちもC組？しかも二番と三番か・・・・・・おれは四番の柏木」

「よろしくな。おれは伊吹義一。せっかくだからクラス一緒に行こうぜ・・・・・自己紹介とかしながらさ。おれこの辺顔なじみいなくて心細いんだよ」

ここ川神市から一駅離れた七浜市の市立中学校には半年以上通っていたが、所謂特別学級で友人らしい友人はできなかった。
普通の生徒たちと同じように普通の学校に通うのは六年ぶりと言っていい。
勉強だけは欠かさずしてきたおかげで私立の進学校に合格できたが、正直入試は冷や汗ものだった。

「地元どこ？県外？おれ地元民」

「アメリカ。ワシントン生まれのワシントン育ち。ニューヨークの病院にしばらくいたけど去年日本に来て、半年ちょっと七浜の方のガッコ通ってたから顔なじみいないの」

「へー。日本語上手いな。ずっとアメリカいたんだろ？」

「父親が日本人だったのよ。日本のサブカルが趣味でな。ドラマでもアニメでも小説でも。興味があったから覚えた。

実際日本にも五、六回来たことあるし・・・・・・で、大和田さんは？」

「あ、は、はい！私は県外です！家族と一緒に越してきました！」

「え、うん、そうなんだ・・・・・・ところで、伊吹ってなんか病気してたの？病院にしばらくいってたって」

あまりにも気合の入った大和田の返答に若干引き気味になりながら、柏木は気安そうな伊吹に水を向ける。
すると、伊吹は彼の言葉に一瞬だけ前髪で隠れている目をキョトンと丸くした。

「ん、いや、怪我だよ。昔テロでちょっとな。傷跡見る？」

ちょっぴり嬉しそうにはにかんで左手につけた白い手袋の指先を摘む。
この世界一有名な配管工がつけているような真っ白な手袋の下には、初見の人は間違いなくびっくりするようなものが隠れているのだ。
これを見せれば掴みはバッチリ。伊吹は勿体つけてにやにやと口元をゆがめた。
しかし、柏木はそういった傷跡とかグロいものが苦手らしく、額に冷や汗を浮かべて後ずさった。

「いいっていいって！っつーか、その手袋って傷跡隠す為なわけ？」

「まあ、そんな感じ。前髪も傷跡を隠す為に長くしてあるんだぜ？かっこいいだろ？」

「ハハハ！かっこよくねーよ。お前のあだ名中二病にしてもいい？」

「好きに呼べよ。おれもお前のこと好きに呼ぶけどな」

「うーん、それじゃチューニ・・・・・・いや、ひねりがない・・・・・・なら、邪鬼眼からとって・・・・・・」

柏木は顎に手を当てて考え込んでしまった。別にあだ名ぐらい好きに呼べばいい。

友達をあだ名で呼ぶのっていいよね。ボケナスとかゴキブリとかハナクソとかインケツとかじゃなければ、だが。

黙っていてもなんだし、義一は先程から会話に参加していない大和田伊予に話を振ってみる。

「話は変わるけどよ、大和田サンはなんか部活とかやる予定あんの？」

「え・・・・・・？」

「いや、部活。おれは料理部とか入ろうかな、と思ってんだ。メシ作るの好きだし」

「そうなんだー・・・・・・伊吹くん体格いいから、運動部に入るかと思ったんだけど、やっぱり後遺症とか残ってるの？」

「後遺症も多少あるけど、それなりに体力は戻ってるよ。リトルリーグで野球やってたこともあるし。エースで四番！決め球は落差のあるスローカーブ！」

窮屈な投球フォームからオーバースローに前へと投げ込む仕草をして見せると、大和田の目の色が変わった。

キター！とでもいいたげなきらきらした眼差しで伊吹を見上げる。
そして、一度だけ深呼吸をして気合を入れなおすと、引きつったような笑みを浮かべて伊吹に質問を投げかけた。

「へ、へえーー・・・・・プロ野球とか、伊吹くんはよく見るの？」

「見るねー。開幕したし、今年も楽しみだな」

きた。きた。きた。大和田伊予の脳内はこんな感じの意味を為さない単語で埋め尽くされていた。
中学時代にはちょっと孤立していたし、高校も新天地で友達ができるか不安だったのだが、早速同じ趣味を持つ同士に会えるとは。
これはひょっとしてひょっとするかも・・・・・などと彼女はそこそこの出来の脳みそで考える。
しかし、いきなりコアな話題に踏み込むとドン引きされてしまうことは想像に難くない。経験則からもいえることだった。
なので、軽くジャブから放つ。

「えっと・・・・・あのね・・・・・私もプロ野球に、ちょっと興味あるんだ」

「そうなのか。この辺だと近くに球場があるから七浜ベイスターズの地元ファンが多いよな」

大和田伊予は神奈川の球団、七浜ベイスターズの熱狂的なファンである。
親から受け継がれたものではあったが、その思いはもはや自分の血肉と言っても過言ではない。
だから話が弾みそうなことに内心で狂喜する。

「そ、そうだよね！おかしくないよね！」

「どうした？」

しかし、ちょっと興奮しすぎて大声が出てしまった。
少し落ち着かねば、と彼女は深呼吸をする。
そして、もう一度初対面の相手だということを再確認してから彼女はぼそっと自分のちょっとした秘密を口にした。

「あ、ごめんなさい・・・・・・えっと、その・・・・・・私もベイスターズのファン・・・・・・だったり、するの」

「へえ、そうなのか。だけど県外のファンって珍しいかもしれんな。この辺じゃあ地元だからファンも珍しくもないが」

「え、なんで？」

「いや、なんというか・・・・・・」

顎に手を当てて、空を眺めながら少しだけ考え込む。
言おうかと考えたことは紛れもない事実だが、少し不愉快にさせてしまうかもしれない。
嘘をつくつもりはないが、相手の機嫌を損ねるようなことは本意ではない。

「なんとゆーか、黒星多いからな。特に去年。九十敗。今年も初戦から負けっぱなしだし。そろそろ挽回して欲しいね」

「う・・・・・・そうなんだよねー・・・・・・」

「おれが応援してるのは名古屋ドアラーズだけど、強いチームがいっぱいいれば野球もまた人気でてくるだろーしな」

近年、野球人口や野球の番組数などがめっきり減っている。
義一が十歳ぐらいの小学生だったころには、夕方に毎日地上波で野球中継をやっていたのに。
今では衛星専門といっても過言ではなく、地上波ではせいぜいハイライトを放送するぐらいだ。

「だよね！野球の話できる人少ないもんね！うれしいな、早速友達できそう・・・・・！」

「そりゃあよかった。よろしくな」

「うん」

しかし、早速打ち解けられそうだ。
伊吹としても趣味の話が出来る相手がクラスにいるのはありがたい。
野球の話ばかりしていても他の友人はできないので、他の話も振ってみる。

「他には趣味とかあるかい？親父がエンジニアだったから昔から機械いじるの得意でさ。
　ちょっとしたヤツなら作れるよ。二足歩行するラジコンとか、無線機とか」

「へえー、よくわからないけど凄いね・・・・・私はサイクリングかなあ。登校も自転車使ってるんだけどね」

「自転車か。桜咲いてるからまだまだ春を楽しめるな。爽やかでいい趣味だ」

風が気持ちよさそうだ。自転車などもう五年近く乗っていない。
子供のころはどこに行くにもマウンテンバイクを乗り回していたものだが。
今となってはその自転車にも乗れない体たらくである。最も、乗れないというよりも乗る資格がないのだが。

「そう？」

「楽しそうだ。おれはまあ、乗れないんだけどな。この年で自転車にも乗れねーのはチト情けないが」

けらけらと快活に笑う。
そんな義一を、後ろから不意打ち気味に羽交い絞めにする柏木。
あだ名は決まったのだろうか。

「・・・・・・ジャッキー」

「ジャッキーになったのか。で、どーした？」

「いきなり女子といい感じになってんじゃねーよっ！」

没個性的で地味で陰気で不審者臭い外見しているくせに、と柏木は義一をこき下ろす。全部事実だからぐうの音も出ない。
しかし、相手が女子だからどうとか、下心があったわけではない。
性別は関係なく、とりあえず友人が早いところ作りたかったのだ。
なぜなら、病院から退院して中学校に復帰したときの記憶が脳裏に焼きついているからである。

「甘いぞ柏木！学園生活は戦場だぞ！仲良しグループを作られてしまったらあぶれた者がぼっち生活を送るのは必死ッ！
　そうなりたかなかったらお前も自己ＰＲして話に加われ！」

「そっ、そうだよ！既に作られたグループに割り込むのは難しいよ！がんばって！」

そう。大和田が同意したように、既に完成された関係性に割り込むのは至難の業だ。
別に義一は引っ込み思案ではないので一対一なら友人関係を築くのは比較的容易い。
だが、仲良しグループという、ある意味閉鎖的な雰囲気を持つ場所に自分から飛び込んでいくには流石に二の足を踏んでしまう。
中にはウマが合わない人間もいるだろうし、よしんば入れたとしても新入りという存在はどうにも居心地がわるいものなのだ。

「うーん。おれの趣味は漫画とかゲームとか、イマドキの若者って感じかなー。彼女も欲しい。せっかく青春なんだから恋してーなー」

「ゲームって据え置き？携帯機？それともゲーセン派？」

「ゲーセン派！今度行こうぜ！駅の近くのゲーセンに戦場のキズが入ったらしくてさ」

「お、ガンニョムのだっけ？いいねー。こんど何人か誘って行くか！・・・・・・大和田さんはゲームは？」

「やるよ。だけど携帯機専門かなー。お金かかるからゲームセンターはあまりいかないし・・・・・・」

「ふーん。じゃあ今度何本か持ってくるから対戦でもしよーぜ。
・・・・・・というわけで、改めて紹介するとおれの趣味は野球とアメフトの観戦。料理。
機械いじりとパソコン関係。素人に毛が生えたみたいなもんだけど、困ったら力になれるだろうよ。
あと、読書も普通にやる。愛読書は雄牛と虎と覚悟のススムだ」

「両方とも漫画じゃねーか・・・・・・まあ、おれも好きだけど。大和田さんは雄牛と虎知ってる？・・・・・・覚悟の方は女子は知らないだろーけど」

「うん、雄牛と虎は知ってるよ。朝子が雄牛の記憶取り戻すところ最高だよね！」

「お、マニアック・・・・・・おれはトンネルの話が好きだなー」

「先生になったんだよね。感動したなあ」

意外と話が弾むものだ。
漫画とかゲームとかは今時の若者にとっては必須科目の一つだが、ここまで役に立つとは。
すっかり距離感を掴むことが出来たおかげで、大和田と柏木とは仲良く出来そうだと判断した義一は自分も話しに混ざる。

「おれは、風が止んだじゃねえか・・・・・・のところが好きだな。
覚悟のススムのコミックスは全巻持ってるから今度持ってくるよ。ぜひ読んで欲しい熱い血潮が流れる名作だぜ！」

「ちょッ、やめろ。あれはいろいろヤバいから」

「え？」

そんな話をしているうちに昇降口についてしまった。
上履きは先日購入したものを持ってきているが、靴箱はどれを使えばいいのだろうか。
わからず周囲の学生たちを見てみると、靴箱は使わず、上履きを入れてきた袋の中に外靴を入れているものが多い。
それに倣って伊吹たちも上履きに履き替える。

「一年はこっちだってさ」

壁に貼られた案内の紙を見て、指示通りにクラスへと向かう。
一年C組。教室は成績順にA、B、C、D、E、Fとあるので真ん中のあたり位置している。
ちなみに、Fの隣に特別進学教室ということで、エリートの集まるS組というものがあるので、一学年七クラスとなる。
この学校は少子化のご時勢だというのに一クラス四十人編成で、七クラス。三学年で生徒総数は八百四十人前後のマンモス校だ。
すれ違う人たちも個性的で多様性に満ち溢れている。見ているだけでも新鮮味があって面白い。
義一はこれから始まる学生生活に胸躍らせるのだった。

## 第二話　義手と義眼と刀とマユズミ

退屈な入学式はスキップ！

退屈な入学式を終え、やる気のなさそうな担任教師の話を聞いて、今は放課後。

とはいえ、時計の短針はまだ十二時になろうかなるまいか、といった具合だ。

せっかくの入学初日にこのままお別れ、というのもなんだし、なにかしたいところだ。

部活の体験入部や活動見学などは明後日以降なので周囲のやつらも暇そうにしている。

「・・・・・・なあ、大和田さん。これから暇か？」

「ううん。お母さんが来てるから一緒に帰る予定だけど、どうかしたの？」

「や、暇じゃないならいいんだ。そーだよな。親御さん来てる人もいるよな・・・・・・」

自分がそうであるように、他人もそうだと決め付けるのも早計だった。
事前に学用品などは購入した者たちが殆どだから、荷物をどっさり持っている者はそれほど多くない。
だから親睦を深める為にみんなで食事でも行かないかと提案しようと思ったのだ。

「うーん、しょうがないか」

二つ後ろの席の柏木を振り返ると、既に帰り支度を終えて席を立っていた。
じゃあな、と手を振って教室から出て行く。
他に暇そうにしているやつはおらんかね、とばかりに教室中を見回すが、出遅れてしまって既に空席が目立っていた。

「・・・・・・帰ろうかな」

いまさら出て行っても間抜けだし、さっさと帰ってしまうか、と義一も席を立つ。
そして、また明日、と誰にとも無く告げて教室を出ようとすると、ふと思い出して立ち止まった。
そういえば、教師に教室の掃除を申し付けられたのだった。
出席番号一番と二番にやらせるのが慣例らしい。
そして、前の席に座る筈だった出席番号一番のやつはあいにく今日は出席しておらず、義一は一人でやるしかない。

「面倒くさいな」

はあ、とため息を一つ吐いて、教室中を見回す。
黒板から掃除するべきだろうか。あるいは、掃除用具入れから掃

除用具を出して床や机からやるべきだろうか。
そうして教室の中へと視線をめぐらせると、やたらと目立つ人物がいた。

（マユズミユキエ・・・・・・だっけか）

朝、遅刻ぎりぎりに教室へと駆け込んで来た女子生徒である。
どうやら所持品、というか持っている刀が原因で職務質問を受けていたらしい。
彼女の父親はマユズミ十一段とかいう、剣道の凄い人で、国からあの刀の所持を許可されているそうな。
だから違法ではないそうだ。
学校に持ってくるのはちょっと常識はずれだが、大事なものなのだろう。

「・・・・・・友達百人・・・・・・・」

そんな彼女はなにやら一人でぶつぶつ呟いている。
義一は視力が悪いので良く見えないが、何か小さなものを手にしているようだ。

「・・・・・・さて、掃除掃除」

興味は湧くが、じろじろ見るのも失礼だろう。
女の子という生き物はぬいぐるみや人形に名前をつけたり、話しかけたりするらしい。
なので、彼女の独り言も別段おかしなことではあるまい。
気にしない方向でいくことにして、義一は教室の前に設けられた授業用の黒板と、教室の後ろに設けられた連絡用の黒板から黒板消しを二つ手に取って窓を開ける。

「ウッ・・・・・・げほ、げほ」

窓を開けたとたんに吹き込んできた風が少し砂っぽかった。
口の中のじゃりじゃりとした感覚に閉口しながらも、義一は窓の開いた隙間から手を出して黒板消しを叩く。
ばふ、ばふ、と吸い込んでいたチョークの粉を吐き出して、黒板消しが少しずつ綺麗になっていく。
少し楽しい。実にエレメンタリースクール以来の感覚だった。

「ヨシ、綺麗になったな」

三十秒も叩けば、白く薄汚れていた黒板消しは元の黒色を取り戻していた。
変わりに手袋が少し汚れてしまっていたが、この場で外すのは少し気がひける。
一応教師には、事前に事情を話してあるが、同級生はどう思うかが少し心配なところだ。
ともあれ、綺麗になった黒板消しで、今日使った案内図が描かれた黒板を綺麗に消していく。
四角く、四隅からじっくりときれいにしていくと、なかなかの達成感があった。

「あとは、もう一度叩いて終わりかな」

再度窓へと向かう際に教室を見回すと、既にマユズミユキエ以外の生徒は残っていなかった。
マユズミはじっと義一のことを射殺すような眼差しで睨み付け、時々手元の何かに話しかけている。
そんな彼女を気にすることなく黒板消しを綺麗にして元の場所へ

と戻す。

「次は・・・・・・」

エレメンタリースクールの頃にやった掃除の手順を思い出す。
机をいったん前に動かしてから、箒やモップで掃き掃除をするのだ。
窓際の列はまだマユズミがいるから動かせないので、廊下側の、義一の席がある列から始める。

「よっこいしょっと」

何も入っていない机は軽いものだ。
この状態では平均的な高校生男子としての身体能力しかないが、この程度なら疲れることもない。
とはいえ、ここまで体力を上げるのにも相当苦労したのだが。
あの頃は地獄だったなあ、とチタン製のボルトとプレートの埋まった右手首をそっと撫でる。
肉の裏にはごつごつとした感触があり、今でも古傷が時折痛む。

「あ、あのッ！い、イ、イブキさん！」

忌まわしい過去へと思いを馳せていると、後ろから声がかかった。
マユズミの声だ。彼女の声は特徴的なのですぐにわかる。
しかし、どもりすぎだろう。

「どうかしたか？」

「えっと、その・・・・・・あの・・・・・・」

口ごもるたびに彼女の眼差しはきつくなる。
日本流に言うならば、親の仇でも見るような眼差し、というやつだ。
知らぬ間に恨みでも買ったのだろうか。そんなことを思いつつ、視線で彼女の言葉を促してみる。

「え、えーっと、その・・・・・・」

『ファイトだまゆっち！今日逃げたら明日はもっと大きな勇気が必要になるぞ！』

「そ、そうですね松風！見守っていてください！」

どこか醒めた眼差しで彼女を見つめる。
新しいギャグ、というか芸を思いついて誰でもいいから聞いて欲しかったのだろうか。
確かにそういう気分になることは義一もある。
まあ、馬の形をした携帯ストラップ、のようなものが悟ったようなことを言うのは、確かにシュールだったが。

「・・・・・・ん？」

「あ、あうう・・・・・・そ、そのですね・・・・・・すー、はー、すー、はーーーーー・・・・・・そ、掃除を手伝わせてくだしゃい！」

「ん・・・・・・ああ、いいのか？ありがたいな・・・・・・それじゃあ、窓際から・・・・・・いや、力仕事は出来るか？」

「ま、任せてください！力仕事には自身あります！」

手伝いたいけど手伝わせてくれと言い出すことが恥ずかしくてしり込みしていたらしい。
こういう子は結構いるものだ。なまじ空気が読めるせいで自分が出て行くタイミングを測れなかったりする。
ちょっと変わった女子だとマユズミのことを認識していたが、改めるべきかもしれない。
なかなかいいやつだ。

「それじゃ、窓際の列から後ろに運んでもらえるか？」

「はいッ！」

言うと、彼女は窓際の列の机を引きずることも無く、しっかり持ち上げて一つ一つ後ろへと運んでいく。
床を傷つけないように配慮しているのだろうが、それでもかなり早い。
力仕事が出来る、ということとは別に、掃除にも慣れているのだろう。
途中まで終わらせていた義一と、後から始めたマユズミの机を運んだ台数に殆ど差がないことから、それが見て取れる。

「それじゃあ、箒出そうぜ」

「はい！」

机を運び終えた彼らは掃除用具入れを開ける。
中には長柄の自在箒が二本と、ちりとりが一つ、それにバケツがあった。
モップは無いからあまり気合入れて掃除する必要はないのだろう。

マユズミが二本自在箒を取り、手渡してくれる。

「あっ」

「おっと、すまんすまん・・・・・・」

からーん、と木製の箒が床に転がる音が響く。目測を誤って受け取り損ねてしまったのだ。

参ったな、と左目を手首の内側でごしごしと擦ると、ふいにマユズミが上目遣いで尋ねてきた。

「あ、あのー、間違ってたら申し訳ないんですけれど・・・・・・」

「んー？」

顔色を伺うような彼女の表情は本当に聞きにくそうだ。

だが、それでも尋ねるのだから余程大事な事情なのだろう。

言ってみろ、とばかりに眼差しで言葉を促す。

「えっと・・・・・・その。イブキさん、右目・・・・・・悪いんですか？」

「わかる？」

あちゃあ、と頭を？いて義一はバツが悪そうにはにかんだ。

右目が悪いのは事実だが、初対面の人に気づかれて、その上指摘されたのは初めてだ。

「はい。自然と右側に気を配ってましたから・・・・・・」

「へー、そういうのでわかるものなのか・・・・・・」

人のことをよく見ている子だ。人間観察とかが趣味なのかもしれない。

あるいは、父親から剣道を習っていたからそういった人体のことに精通しているのかもしれない。

なんにせよ一発で見抜くとは大した洞察力だ。

「まあ、見えなくてな。ちょっと迷惑かけるかもしれない。悪いな」

「あっ、いえいえ！迷惑だなんてそんな！そういうことではなくてですね。その・・・・・・」

『まゆっち頑張れ！言うんだ！友達を作るにはまず自分から手を差し出さなくちゃならないんだ！』

「・・・・・・」

また馬の携帯ストラップと話し始めた。持ち芸なのか。

本人は真剣そのものの表情だが、見ている側としてはなんとも言えない気分になる。

「そのッ、治療できるかもしれない場所を知っていまして、それで・・・・・・」

「ん・・・・・・」

「もしよろしければ・・・・・・！」

話の流れから察するに、右目を治療できそうな場所を知っている

からそれを紹介してくれるというのだろう。
だが、それは不可能だ。もう二度とこの右目は見えるようにはならない。
そもそも、見えるようになるものが？ない？のだ。
変わったやつでもあるが、やっぱりいいやつだなと思いつつ、義一は笑顔で一つ提案をする。

「マユズミさん。一つ賭けをしないか？」

「へ？」

「賭けるものは缶ジュース一本。賭けの内容は・・・・・・そうだな。おれが右目を噛めるかどうか」

そう言ってかちかちと歯をかみ鳴らしてみると、突然の提案にマユズミは目をぱちくりさせている。
やっぱりこいつはいいやつだ。くだらないことを秘密にしてあまり気を遣わせたくはない。
だから、この際全部話してしまうことにする。
距離をとられるかもしれないが、そのときはそのときだ。しょうがない。

「さあ、賭けるか、賭けないか！」

「え、目を歯で噛むんですよね・・・・・・？でしたら・・・・・・噛めない、に賭けます」

人差し指を突きつけて急かすと、戸惑いながらも彼女は噛めないに賭けた。
当然の判断だろう。人間の口は自分の目を噛めるようには出来て

いない。
どんな生物だってそれは同じだ。わざわざ負けるつもりもないだろうし、マユズミはそう答えた。
だが・・・・・・
「残念。おれの勝ちだ」
義一はそういってにやりと笑うと、自分の右目に人差し指を突っ込んだ。
マユズミははっと目を見開いて口元を押さえる。ようやくこの可能性に行き着いたようだ。
ずるりと指先で引きずり出される目玉。だが、そこには視神経や血管などは通っていない。
そう、義一の右目は義眼だった。
日本では認可の下りていない、目の筋肉に同期して動く、義眼台のついたものだから彼女もわからなかったのだろう。
「こーいうワケ。また目が見えるようになるには機械でも仕込んで脳みそに繋ぐしかないかな。
モノクロで脳みそに出力する義眼はもう出来てるみたいだけど、結構大掛かりな手術が必要になるみたいだしそれほど困ってないからさ。
気持ちだけ受け取っとくよ。ありがとう」
「あ、そ、その・・・・・・すみませんッ！」
まるでコメツキバッタみたいに頭を下げるマユズミの顔は世界の終わりのように真っ青だ。
抉れた眼窩を見てびびっているのならともかく、失礼なことをしたとでも思っているのならば、勘違いだ。

別にこの程度失礼でもなんでもない。善意で申し出てくれたことだろうに。

「頭なんて下げないでくれよ。気遣ってくれたってのはわかってるからさ・・・・・・

六年もこれだと慣れっこだよ。テロあっただろ？そのとき瓦礫にやられてね。だけどもう大分いいんだ」

目だけではなく、頭、腕、脚、臓器、脊椎などの重要な器官の大部分を損傷してしまった。

脳内出血して壊死した部分を切り取ったせいで運動神経がやられてしまい、一年以上ベッドの上で過ごしていた。

殆ど動かない自分の身体を、一つになった自分の目玉で見下ろすのは酷く惨めな気持ちにさせられたものだ。

「い、いいえ！己の無神経さを痛感いたしました！！かくなる上は切腹にて恥を濯がせていただ・・・・・・！」

「やめろ！アホか！」

いきなり刀を抜き放って自害しようとするマユズミに、ごつん、と右手で拳骨を落とす。

この程度の勘違いでいちいち自害していては、人類なんてあっという間に滅びてしまうではないか。

大体、迷惑とも思ってないことをそんなに気に病まれてはこちらが申し訳なくなってくる。

「うぅ・・・・・・これでは友達百人など夢のまた夢です・・・・・・」

『まゆっちー、お前は今泣いていいんだぜ・・・・・・だけど、泣き止んだら次は明日を向くんだ』

「あんた結構余裕だな」

自害しようとしたり、泣いたり、芸をして見せたりと、くるくる表情が変わる。

この手の人間の亜種に、義一には父親の伊吹幸一がいる為慣れたものだが、常人ではついていけまい。

「あっ、い、いえ！松風は携帯ストラップに宿った九十九神でして！私の意志とはまったくの無関係で・・・・・・！」

『全知全能なる父神に反逆した死を司る神の屍骸から作り出された窮極兵装にして完全なる個、それがオラなんだ・・・・・・』

「そうか」

そんな独自設定を作ってしまうとは、友達がいなすぎて狂ったのかもしれない。

義一も似たような経験がある。脳みそに電極差して、電流で手足動かしていた頃はいい感じに発狂していたらしい。

同じ汚泥の中で足掻く同胞を見るような、慈愛の目でマユズミを見つめる。

「な、なんですかその生暖かい眼差しは」

「いや・・・・・・まあ、掃除、やろうぜ？」

遊んでいてはいつまで経っても帰れない。時計を見ると丁度短針

が頂点を指し、校内にチャイムが鳴り響いた。
もうじき上級生が昼休みになって廊下に溢れるだろう。そうなっては帰りづらいに違いない。
取り外していた右目を元の位置にはめなおすと、義一は自在箒を拾い上げて清掃を始める。

「あっ、はい！」

「後さ、おれ左腕義手だけど特に気を遣う必要ないから。人並み以上に動くからな」

そう言って左手の手袋を外すと、金属の光沢がそこには隠されていた。
指先や手のひらにはグリップがついているが、他は材質不明の金属、ないしは強化プラスチックやセラミックで作られているのだろう。
まるでＳＦ映画で出てくるサイボーグのような義手にマユズミは目を奪われる。

『マジかっけー！パパ！オラもアレ欲しい！』

「あなたにパパと呼ばれる筋合いはありません」

「・・・・・・っつーわけで、これ以上気に病んだり気を遣ったりするのは止せ。こっちの神経が疲れる」

「で、ですが・・・・・・」

「うるせえおれが神だ！」

「Ｉ　ｕｎｄｅｒｄｓｔａｎｄ　Ｇｏｄ！」

「いい発音だ」

マユズミと喋ってるのか松風と喋ってるのかわからなくなってくる。が、まあいい。

ともかく、もうこの話はこれで終わりだ。腹も減ってきたし、さっさと掃除を終えて帰宅したいのだ。

義一はマユズミと協力して一箇所に集めたゴミをちりとりでゴミ箱に放り込むと、手を洗って戸締りをする。

モチロン、義手は防水だ。内臓機器の配線が見えるぐらいまで破損しないと漏電は起こさない。そういったコンセプトで作られている。

「おら、荷物持って出てった出てった！」

「はい！」

マユズミを追い出すと、義一は鍵を職員室へと戻しに行く。

廊下を歩くと、昼休みまではもう少し時間があるだろうにフライング組の上級生がうろうろしていた。

学食が開くのを待っているのだろう。食い意地が張っている。

おしろいを顔に塗りたくった公家のような顔立ちの教師に鍵を渡すと、そのまま下駄箱へと直行。

このまま帰るのも何なので帰りは外食でもしていくつもりだ。

「昼飯は・・・・・・カレーな気分だな」

「そうですか？私はお蕎麦な気分です」

『オラは肉系ならなんでもかな』

「・・・・・・」

なんでいるんだこいつは。職員室まで着いてきたのにすら気づかなかったが、ついてきていたのか。

下駄箱で、上靴からくたびれたオックスフォードに履き替えると、対面の下駄箱ではマユズミがローファーに履き替えていた。

とりあえず気に留めずに財布を取り出して中身を確認すると、二万円のほかにカレー屋の優待券とうどん屋の割引券が入っていた。

どちらもアンケートで応募して当たったヤツだ。期限はどちらも今月いっぱいなのでまだ使える。

「・・・・・昼飯これから食いに行かないか？うどん屋でいいなら三割お得な割引券があるんだが。蕎麦もやってる店だ」

「え、いいんですか？」

「おごりはしないぜ。今月ヤバいんだ」

「も、勿論です！むしろ私がお金を出しても！」

「いらないっつーの。行くなら行こうぜ。駅の近くだから少し歩くぞ」

「はいっ！」

今日は三人の気のいいやつらと知り合えた。

変なヤツでもあるが、これからの学校生活はそれなりに楽しくやれそうだ。

そう、義一は春の晴天を仰いであくびを一つした。

## 第三話　そんなことよりおなかがすいたよ（前書き）

Ｍｏｕｎｔ＆Ｂｌａｄｅが面白すぎて更新が遅れました。申し訳ない。

ＰＯＰ作った人も天才だろ・・・・・・

## 第三話　そんなことよりおなかがすいたよ

ところ変わって全国チェーン店の蕎麦屋へとやってきた義一とマユズミ。
マユズミが持っているカタナ袋のせいか、客や店員の視線が露骨でうざったい。
もっとも、本物かどうか確認することなどできないだろうから無視する。
そして期間限定らしいなめこおろし系メニューは華麗にスルーして、いつものように釜揚げうどん大盛りにキス天、かぼちゃ天を注文。
マユズミはこういった店に来た事自体無かったらしく、適当にザル蕎麦大盛りと野菜の掻き揚げを注文してやる。
女の子だからこんなに食わないかもしれないが、残ったら残ったで仕方ない。
目の前で店員がうどんやら蕎麦やらを茹で、水でしめている。
そして出来た麺はザルに乗せられたり、あるいはつゆへと投入されていくのだが、よどみなく動くさまはひとつの機械のようだ。
こういうのを見るのもなかなか楽しいものだ。

「あっ」

「どうした？」

「その・・・・・・私もかぼちゃ天、追加していいですか？」

おずおずと、遠慮がちにかぼちゃのてんぷらを追加したいとマユズミが言う。

ここの大盛りは普通盛りと対して値段は変わらないが量は二倍になっているのだが食べ切れるのか。

育ち盛りな年頃だし、剣道やってるみたいだから見かけによらず健啖家なのかもしれない。

そんなことを考えつつ、義一は料理の盛り付けをやっている店員に声をかける。

「結構食うねえ・・・・・・店員さん追加いいです？」

「はい！なんでしょうか？」

「かぼちゃ天一個ザルの方に付けといてください」

「はい！」

店員のおねーさんの営業スマイルに対し、ありがとうという言葉とともに、にかっと爽やかな笑みを浮かべる。

すると、軽く手を振って返してくれた。なかなか気のいい人だ。

「あの・・・・・・」

そんなことを考えていると、マユズミが義一の袖を引っ張った。

二十センチ近い背丈の差があるから、後ろにいる彼女を肩越しから振り返ると、見下ろすようなカタチになる。

「何かあったか？」

「いえ、その・・・・・・店員の方とは、お知り合いなんですか？」

「いや、違う。初対面・・・・・・いや、前に来たときもいたかな・・・・・・？まあ、ともかく知り合いとか友人ってわけじゃない」

「そ、そうなんですか・・・・・・」

何故かは不明、というか、常人には理解し難い苦悩があるのだろう。

今の義一と店員のやり取りを見て、マユズミはショックを受けているようだった。

そんな彼女をじっと見つめると、彼女は手にした馬の根付、？マツカゼ？とおしゃべりしている。

『焦らなくてもいいんだまゆっち。少しずつ前に進んでいけば、来年の今頃にはヨッシーみたいに気さくにおしゃべりできるようになるって！』

「松風・・・・・・」

盗み聞きしてみると、なにやら友達を作る為の算段を立てているようだった。

もしやヨッシー、とは義一のヨシ、から来ているのか。どこぞの自称スーパードラゴンみたいだが、まあいい。

ともあれ、いい感じの表情を作り出そうと百面相している彼女ははっきり言って不審だ。

「お待たせしました！ザル蕎麦大盛り、釜揚げ大盛り、掻き揚げ、柏、キス天、かぼちゃ天で、占めて丁度千円になります」

「あ、これまだ使えますよね」

愛想のいいおばさん店員に、義一は財布から取り出した優待券と千円札を渡す。

６月末まで有効の二十パーセントオフのクーポンだ。

「はい。ご使用になれます。・・・・・・ええと、三十パーセント引きで、七百円になります」

「それじゃ、千円からで。小銭無いんで」

そして、千円から引いた分のつり銭と一緒に、うどんとてんぷらの乗った盆を受け取る。

釜揚げうどんは湯が張られたままの状態のうどんで、湯気が立っていてとても旨そうだ。

「あ、お金・・・・・・」

「清算は後でな。レシート貰ってあるから」

マツカゼとおしゃべりしている間に金を払ってもらってしまったことにマユズミは焦る。

しかし、義一もおごるつもりなどさらさら無い。何故赤貧の身で今日会ったばかりのクラスメイトに飯をおごらねばならないのか。

むしろジュースをおごってもらう権利がある。もっとも、会話の糸口に賭けを使っただけだからジュース代を請求するつもりはないのだが。

ぴらぴらとはためくレシートを見せると、マユズミは、わかりました、とだけ言ってうなづいた。

「しっかしよ・・・・・・こういう店来た事無いって、どういう暮らししてたんだよ」

目星を付けていた席に料理の載った盆を置くと、義一はふと聞いてみた。

この手のチェーン店は全国どこにでもあるし、新聞さえとっていれば毎回必ずクーポン付きのチラシなどを目にするはずだ。

月に一度家族で外食、なんてのは日本でも別に珍しいことじゃないだろうに。

もしや、この手の店に入ったことが無い、というのは、？こんな貧乏人が来るような店には来た事無いですｗｗｗ？みたいな意味なのだろうか。

オドオドと挙動不審なクラスメイトがそんなことを思っているとは考えづらいのだが。

「あ、家でも自炊が殆どでしたので・・・・・・」

「フーン、料理得意みたいだな・・・・・・おれも料理するんだぜ？得意料理はロールキャベツとキャベツ丼」

言いながら、指先で摘んだ割り箸を二つに割る。

昔は目測に指を動かすことさえ困難だったが、今では微妙な動作も、細工さえこなせる。

「キャベツばっかりですね」

「近所のスーパーだと安いんだよ最近。こんなでかいのが七十八円。

もやしも特価でさあ・・・・・・買い込んじまった」

直径三十センチぐらいの空洞を作るように両手を広げる。

昨日行き着けのスーパーでキャベツを三つと、もやしを五袋購入したところだ。

キャベツは既に一個、適当な野菜やベーコン、コンソメを突っ込んで一鍋キャベツ煮にした。

火入れしたり、アレンジしたりしながら四日間持たせるつもりだ。

「安いですね・・・・・・どこのお店なんですか？」

「橋渡って向こう側の・・・・・・えーっと、ハビエルビルってわかる？悪趣味などぎついピンク色のビル」

「いえ・・・・・こっちに来たのは下見に一度だけで、殆ど今日が初めてです」

「ム、そうなのか・・・・・・もしかして一人暮らしか？」

「はい。今日から寮住まいになります」

意外、でもなかった。家事ができるのならば仕送りさえあれば自活できるだろうし、寮なら尚更だ。

もっとも、この挙動不審なクラスメイトがその寮の人間になじめるかどうかは怪しいが。律儀なヤツなので杞憂かもしれない。

ふーん、と一言だけ呟くと、義一はうどんつゆに大量の生姜と刻みネギをぶち込んでうどんを食べる。

つゆと薬味の味がうどんに絡みつき、口の中に幸せを運んでくる。

しみじみ・・・・・・しみじみ、美味い物を食っている時は幸せだ。

「うまいな」

「ずるずる・・・・・・あ、ホント美味しいです。てんぷらもサクサクで・・・・・・」

「だろ？・・・・・・ずるずるずる・・・・・・で、お前は親元離れて一人寮住まいか？なかなか気合入ってるじゃねーか」

「ずるずるずる・・・・・・初めて親元を離れて生活をするので、うまく寮の人たちに溶け込めるか心配で心配で・・・・・・」

『まゆっち昨日は興奮のあまり眠れなかったんだぜー？』

「松風！」

「オ、言われて見りゃあ目の下がほんのり暗いな。隈ができてる」

マユズミの目元を指差してけらけらと笑ってみせると、彼女は恥ずかしそうに顔を隠した。

さっきまでの彼女よりも、ホンモノ、っぽい仕草だ。緊張が解けてきたのかもしれない。

美味い物を食べているときは誰だって幸福で、満たされる。だから、引っ込み事案なヤツも少しおしゃべりになったりもする。

なんのことはない。変わったやつだが、まあ、それでもマユズミは普通の女の子だ。

「まあ、お前なら大丈夫だろ。溶け込めるって」

「ほ、本当にそう思いますか？」

「嘘は嫌いだ。まあ、お前いいやつだしな。すぐ仲良くなれるさ」

本心、そう思っているから義一の返答は淀みなかった。

入学式初日から、初対面のクラスメイトに掃除の手伝いを申し出るようなヤツはそうはいない。

「そうですか!?ほ、本当に・・・・・・!友達できると思いますか?」

「出来るさモチロン・・・・・・入学初日で早速友達できたじゃねえか」

「え・・・・・・友達?今日?」

『やっべ、オラのあずかり知らぬところでまゆっちいつの間に友達できたんだよー!記念すべき一人目ジャン!』

「私も初耳です!?」

混乱のあまりマツカゼとおしゃべりを始めるマユズミ。

顔を赤くして目を丸くしてあわあわ言っている。一人目、ということは今までさっぱり友達いなかったのか。この歳まで。

義一自身、大怪我してからここ数年、友人と呼べるような相手は片手で足りるほどしかできなかったから他人事ではないが。

「・・・・・・ん、まあ、学校帰りに買い食いなんて友達じゃなきゃやらないと思うがな・・・・・・」

友達かそうでないクラスメイトか。その線引きなどはどうでもい

い。
重要なのは、?自分が友達と思っている相手?が、?自分のことを友達と思っている?ことだ。
それも他人の脳みその中を覗く権利を誰もが持っていない以上、証明することはないのだが。
だから、義一は聞いてみる。

「なあ、マユズミ。お前はおれと友達になりたいと思うか?おれはお前と友達になりたいと思うんだが」

「え、えぇ!?」

混乱のあまり目を回すというのはこのことか。視線がぐるぐると義一を中心として円を描くように動き、一定しない。
何かしらの理由で相手を直視できないから、混乱のあまりこうなってしまうのだろう。
コミュニケーション能力の不足ゆえ、かもしれない。

「んー、お前友達いないらしいからピンと来ないか?また一緒にメシ食いに行こうって言ってんだよ。
おしゃべりすんのも、遊びに行く算段立てるのも、勉強だの掃除だの手伝うのも、そういうのもやろうぜ。
別にあーしろこーしろ、ってのはないからさ、気楽にな・・・・・・」

それだけ言うと、義一はハネたうどんのつゆで汚れてしまった手袋を濡れふきんでそっと叩いた。
彼女の場合混乱のあまりしばらくマトモに返事などできそうにないから、どうでもいいことで時間をやっているのだ。
今後の予定などはないが、何の気なしに時計を見るともうじき一

時を回りそうだった。
そして、秒針が一周してきたところを見計らってマユズミに返答を聞く。

「・・・・・・どうする？・・・・・・いや、どう思う？」

「・・・・・・・」

『・・・・・・・』

がやがやとうるさいうどん屋の中、静まり返る窓際席の一角。
まっすぐ見つめる男と俯いて肩を震わせている女を周りから見たら、きっと別れ話でもしているように見えただろう。
なかなか見た目美形なマユズミと不審者カットの義一がつりあうかは別として。

「ふ・・・・・・・」

「ふ？」

「不束者ですがッ、よろしくお願いしますッ！」

店内に響く大声。そしてびしっと効果音まで立てて、三つ指ついて頭を下げるマユズミ。
店中の視線が義一とマユズミに突き刺さる。神経入ってない義一も流石にこれには堪える。
とりあえず店から早く出たいな、などと思いつつ、義一は彼女の手を取って固く握手を交わすのだった。

## 第三話　そんなことよりおなかがすいたよ（後書き）

ｉｎＦＡＭＯＵＳ要素はもちょっと先で出てくる・・・・・・ハズ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3872x/

---

真剣で私に恋しなさい！～川神市逗留記～

2011年11月1日02時09分発行